属人区長の書簡 (2011年8月)

2011/08/08

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

この手紙が皆さんの手元に届く二、 三日前から、私はコンゴの首都キン シャサにいます。先月は、7日から 12日まで、コートジボワールに滞在 しました。アビジャンでもヤムスク 口でも、オプス・デイの使徒職活動 に参加している多くの人たちと共 に、皆さんの兄弟姉妹との集まりを 持ちました。いたるところで、属人 区に所属する信者たちが、多くの人 たちと協力しつつ実践している使徒 職の進展振りを確認することができ て、喜びでいっぱいです。聖母の取 次ぎを通して、また私たちがいつも 頼りにしている聖ホセマリアの頼み を聞き入れて、恩恵を絶えずもたら してくださる神に感謝しましょう。 創立者は、この地上において私たち 皆の一人ひとりのことを気遣ってく ださっていたのですから、天国から

はより完全で徹底した助けをいつも 下さるはずです。

全ての場所から、使徒職発展を支え 続けるようお願いします。このこと は、その人生最後の日に至るまで創 立者の日々を特徴付けた点でした。 既にオプス・デイの使徒職が始まっ ているところや、始まったばかりの ところのために祈りましょう。キリ ストの教えと共に、オプス・デイの 精神の種を蒔きたいと思っている他 の国々のことも、忘れてはなりませ ん。ことに、直近の国として、スリ ランカのために祈りましょう。一人 ひとり自問して下さい。あなたの祈 りを勘定に入れてもかまわない、と 言えるほどですか。付き合っている 人たちのためにどのように祈ってい ますか。小さな、あるいはそれほど 小さくない、犠牲を捧げています か。聖ホセマリアが言われたことを 思い起こしましょう。「十字架から でなければ(…)、全人類を愛する ことはできません。」[i]

自国内での、あるいは世界中での使 徒職発展のこのような望みを、聖母 の甘美であり汚れなき御心に託しま しょう。創立者が、1951年8月15日 になされたオプス・デイの奉献を、 毎年、被昇天の大祝日に更新しま す。今年は、オプス・デイと私たち 一人ひとりに対する保護と配慮を願 うと共に、今度の旅行後の私の感謝 にも一致してくれるように願いま す。同時に、今月後半、マドリード に世界中からの数知れない若者たち が参集する、ワールド・ユース・デ イの霊的実りのために祈りましょ う。

今月の7日は、創立者が神からの特 別な照らしを受けてから80年になり ます。それは、1928年10月2日に歩 み始めた道を広め、確実なものにす ると同時に、教会の懐におけるこの 特別で聖なる使命に新たな弾みをつ けるために、いつも祈りという唯一 の手段を頼りにしていた創立者に、 あらためてこの日、熱心に祈ること の必要性を神が再確認させてくだ さったのです。1931年8月7日の出来 事は、明記されていることですから 皆よく知っています。創立者のこれ らの言葉は、懐かしむだけのための ものではなく、オプス・デイに関す る神のご計画に信頼を置き、最善の

忠誠を尽くす励みとするためです。 聖ホセマリアの人生におけるこの出 来事を、より深く理解できるよう助 けてくださるよう、聖霊に願いま しょう。というのも、それはいつも 今日的なことであり、一人ひとりが 個人的に応えるべきことだからで す。

当時、マドリードではこの日に主の 変容の祝日が祝われていました。創 立者が法学博士課程に入るため首都 に転居してから数年が経っていまし た。創立者はこう記しています。

「ミサの中で自分の意向のために 祈ったときに、首都での滞在期間中 に神が私の内部に起こされた変化を 感じた。その変化は、私自身による ものではなく、私の協力なしに起 こったものだと断言できる。」[ii]

このように、何よりも1928年10月2 日以降に主が実現されてきた内的変 化について、記録を残されたのでし た。このことを自覚されたのが、創 立者がin persona Christi キリストの ペルソナにおいて十字架のいけにえ を再現する、ミサの最中であった点 に注目しましょう。ごミサとは、 「カトリック信者の霊的生活の中心 であり根源である」「iii]といつも繰 り返しておられました。私たちの全 存在に力を与える源泉であり、考え や言葉や行いが収束する一点なので す。来る日も来る日もミサ聖祭をよ く捧げる、あるいは与るよう努める ことは、慰め主に働いて頂くために 不可欠な条件です。聖霊は私たちが よい道具となるよう、私たちの心を 改善し、イエス・キリストにますま す似たものにしようと望んでおられ

聖ホセマリアは、その内的変化が主のみ業によるものであったと記しました。「私自身によるものではなく、私の協力なしに起こったものだと断言できる。」同時に、オプス・

るからです。

デイ創立以前にも、聖霊の働きに委 ねようと努めていました。それを はっきりと物語るのが、1928年10月 2日に先立つ数年間、Domine, ut videam!; Domina, ut sit! 主よ、見え ますように、聖母よ、成就しますよ うに、という射祷を絶えず唱えてい たことです。創立者に倣い、朗読さ れる聖書や様々なミサ中の祈りを通 して主が私たちに示そうとしておら れることを見つけ出すように努めつ つ、神のみことばに耳を傾ける心積 もりでミサ聖祭に参加しましょう。 主が私たちの心に神の愛を燃え立た せようとお使いになる、これらの言 葉を活用して、自分の念祷を豊かな ものにし、神の現存を深めています か。私たちの霊的生活が、教会の典 礼によって導かれ、それに沿ったも のであるよう努めていますか。

創立者は「自分の人生全体を神のみ 旨、すなわちオプス・デイの実現の ために捧げる決心を更新したと思 う。」と述べ、次のように付け加え でいます。「この決心を、今こが でいます。「この決心を、」 [iv] にも、心がのでではない。 「にも、病気や貧しないの困難にはないない。 たり、するにはないないないではないではないではないではないでででででででいます。 おいば、まないないではないでででいる。 は、まれば、ないないででででいる。 は、ないないででででいる。 は、ないないででいるとでいる。 は、ないないできることでいる。 は、たてくださることでいる。 う。

聖変化の後で、創立者が信徒の礼拝のためにご聖体を高く掲げたとき、聖書のある一節が力強く心に響きれていた。当時の典礼で用いられていた、ブルガタ訳の次の言葉です。Si exaltatus fuero a terra, omnia traham ad meipsum[v] 私は地上から上げられるとき、全ての人を自分のもとに引き寄せよう。聖ホセマリアは、この音なき神のみことばを聞いた時、最初は恐れを感じたと記し

ています。これは、三重に聖である 神のあまりの近さを感じた人が、自 分の弱さを自覚するがゆえに大きく 動揺せざるを得ないと同時に、内的 に深い平和も味わうという反応で す。創立者はそれをこう言い表しま した。「ふつう私は超自然的な出来 事を前にすると恐れを感じる。する と『恐れるな、私だ。』という声が あり、すべてが理解できた。あらゆ る人間活動の頂点に、キリストの教 えという十字架を立てるのは神を信 じる人々であろう、と…。そして、 主がご自分のもとに全てのことを引 き寄せながら勝利するのを目にし た。| [vi]

神が、聖ホセマリアを照らし強めようとお許しになったこの極めて超自然的な出来事には、時の経過と共にオプス・デイにやって来るであろう私たち一人ひとり、あなたと私が含まれていたのです。私たちのほとんどはまだ生まれていなかったにもか

子どもたちよ、オプス・デイは私た の手中にあると繰り返しを提出を は、単に信心的な考えのと提出を のではありません。来る日も、 を書きないと打ちいるのではかける のではありません。 のではありません。 ではありません。 ではみのこ打ちいる がはましょう。 を考えましょう。 をあらゆる助けを神が送って なあらとに、 信頼しましょう。 ス・アクィナスの言葉がぴったり当てはまります。「神がある使命のためにお選びになった人々は、その使命を果たす力を神から与えられ、準備されている。コリント人への第2の手紙3章6節にある通りである。

『神は私たちに新しい契約の奉仕者 となる資格を与え給うた』。」[<u>vii</u>]

さらに私たちには、主が創立者に託 された霊的宝に満ち溢れた、多くの 著書が残されています。創立者はそ の内的覚書にこう記しています。 「自分が徳も知恵もない惨めな者だ と感じるが (…)、にもかかわら ず、炎のような本を書きたい。その 火は世界に燃え広がり、人々の心に 光と火をつけ、主の王冠を飾るル ビーとして捧げるために、哀れな心 を燃える炭火に変えるだろう。」 [viii] 創立者のこの熱望は実現されま した。世界中の数知れない人々が、 創立者の説教集や著作から霊的な糧 を得ています。それらをしっかりと

読み、人々に知らせ、より多くの言語で出版することは、非常に効果的な使徒職の手段です。そうすることによって、人々の善のために役立つ、聖ホセマリアのメッセージとオプス・デイの使徒職がますます広がり、丁度、湖に投げられた石が波を描くように[ix]、思いがけないところまで届くことでしょう。

私も参加するよう招かれている、第 26回「世界青年の日」のメッセージ の中で、教皇様はこの集いのテーマ である、「イエス・キリストに根を 下ろして造り上げられ、信仰をしっ かり守りなさい | [x]という言葉を解 説しておられます。この集いに参加 する多くの人にとっては、多分、こ れまで経験したことがないような、 キリストとの特別な出会いになるで しょう。少なくとも主をもっとよく 知る機会となり、主との個人的な友 情を深めることができるでしょう。 この出会いが、輝いたかと思うとす

ぐに消えてしまう花火のようなもの にならないよう努めましょう。その ためには、これらの日々の霊的経験 を継続的に振り返り、保ち続けるこ とが、参加者にとっても、私たちに とっても極めて重要です。私たち皆 が、各自、キリスト信者としての生 活を深めるための具体的な決意を立 てるよう、出来る限りのことをしま しょう。「神の御子との出会いは、 私たちの存在全てに新たな力を与え ます| [xi]と教皇様が強調しておら れます。それに対する感謝のしるし として、多くの人が自分のたどるべ き道について自問するはずです。若 者たちというものは、遅かれ早か れ、多分その真意に気付くこともな いままに、そのような質問を自身に するのです。最初は、仕事の選択や 什事の開始、家庭を持つことなどの 点に限られているでしょうが、将来 に関して自問を続ける背後には、次 のような、より深く重要なことが脈 打っているのです。私の人生にはど

んな意味があるのだろうか。どのようにして、それを全面的に実現できるのだろうか。

この集いの開催地が、神のみ旨に よってオプス・デイが誕生した町で あることを考えると、創立者が様々 な折にコメントされたことが記憶に よみがえります。タルソのサウロが 使徒職に呼ばれた時のエピソード を、神への感謝のうちに思い出して おられました。例えば、1965年には こう記しておられます。「ダマスコ への途上のパウロのように、マド リードで私の目からうろこが落ち、 そこで使命を受けました。| [xii] 教 皇様司式のもとに開催されるこの行 事において、多くの若者が〈自分の ダマスコ〉を体験するよう、神に願 い求めましょう。そして、その若者 たちが神の光に向かって目を開き、 イエスが招いておられる召し出しを 受け入れ、主に従う決意を固めます ように。それが、真摯に主と共に歩

む多くの男女を必要としている教会 の希望に応える、最善の方法です。 ベネディクト16世が説明されていま す。「イエス・キリストのうちに造 り上げられることは、神の呼びかけ に進んでこたえ、神を信頼し、みこ とばを実践することを意味しま す。」[xiii] そして、特に若者に向け て、こうつけ加えられました。 「『地面を深く掘り下げ』た人のよ うに、岩の上に自分の家を建ててく ださい。日々、キリストのことばに 従うよう努めてください。人生を分 かち合うことができる真の友である

先に勧めたことを繰り返します。この期間中、皆さんの多くの友人や知人が、神の恩恵の実りとして見つけることがらを、通常の生活の中でも継続させていかなければならないということです。教皇様は、次のように道を示しておられます。「イエ

イエスに耳を傾けてください。|

[xiv]

ス・キリストと人格的な対話を始 め、信仰のうちにそれを深めてくだ さい。福音書と『カトリック教会の カテキズム』を読むことによって、 イエスをより深く知ってください。 祈りのうちにイエスと語らい、イエ スを信頼してください。| [xv] 個人 的な対話の中で、神の子としての超 自然的な命の泉である、ゆるしの秘 跡とご聖体の秘跡に度々与る必要の あることを伝えましょう。勉強や仕 事を聖化し、使徒職の熱意を持って 人々を気遣うことを学ぶことも必要 です。人をキリストに近づかせるよ うに努めることこそが、師なるイエ スへの自己の忠実を確かなものとす るための最上の方法の一つでもあり ます。教皇様の次の言葉を、その人 たちに繰り返しましょう。「キリス トは私たちだけの宝ではありませ ん。私たちは、キリストというもっ とも貴重な宝を他者と分かち合うべ きです。| [xvi]

被昇天の祭日が近づいています。聖ホセマリアが、聖母のこの祝日の説教の締めくくりとして使った言葉を考察するように皆さんに勧めて、この手紙を終えようと思います。

「Cor Mariæ Dulcissimum, iter para tutum いとも甘美なるマリアの御心、地上における道行に力と安全をお与えください。御自ら私の道となってください。イエス・キリストへの愛に導く近道を御身はご存知ですから。」 [xvii] 愛するドン・アルバロがお使いになった射祷、iter para et serva tutum! 道を整え守ってください、という言葉も加えることができるでしょう。

心からの愛情を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

キンシャサ、2011年8月1日

[i] 聖ホセマリア、1971年10月2日、 説教のメモ。

[ii] 聖ホセマリア、内的覚え書き、n. 217 (7-VIII-1931) A. Vázquez de Prada, 『オプス・デイの創立者』第一巻380-381ページ参照。

<u>[iii]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』 87。

[iv] 聖ホセマリア、内的覚え書き、 n. 217(7-VIII-1931)A. Vázquez de Prada, 同上参照。

[v] ヨハネ12,32. (ブルガタ訳版)

[vi] 聖ホセマリア、内的覚え書き、n.217(7-VIII-1931)A. Vázquez de Prada, 『オプス・デイの創立者』第一巻6章の5参照。

[vii] 聖トマス・アクィナス、『神学 大全』III, q.27, a. 4. [viii] 聖ホセマリア、内的覚え書き、 n.218(1931年8月7日). A.Vázquez de Prada, 同上参照。

[ix] 聖ホセマリア、『道』831参照。

[x] コロサイ2,7参照。

[xi] ベネディクト16世、2010年8月6日『2011年第26回世界青年の日メッセージ』。

[xii] 聖ホセマリア、1965年10月2日 手紙。

[xiii] ベネディクト16世、2010年8月6日『2011年、第26回世界青年の日メッセージ』。

[xiv] 同上。

[xv] 同上。

[xvi] 同上。

[xvii]	聖ホセマリア、	『知識の香』
178 _°		

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2011nian-8yue/ (2025/12/15)